




論文審査結果の要旨

報告番号	甲 薬 第 236 号	氏 名	組 橋 由 記
審査委員	主 査	土 屋 浩 一 郎	
	副 査	佐 藤 陽 一	
	副 査	藤 野 裕 道	

学位論文題目

大腸癌患者における Cape0X 療法による副作用発現の予測に関する研究

審査結果の要旨

大腸癌における Cape0X 療法は、術後補助化学療法として、再発進行癌に対する初回治療に用いられる重要なレジメンである。しかし、早期に副作用が発現するため、治療の延期や投与量の減量を必要とする症例がみられる。従って、Cape0X 療法開始前に副作用を予測することができれば、患者に合わせた副作用マネジメントが可能になる。

申請者は、Cape0X 療法により早期副作用発現に関連する因子を明らかにし、副作用発現予測モデルを構築することを目的に、大腸癌と診断され Cape0X 療法を受けた患者 178 人を対象に診療情報を収集し検討を行った。早期副作用発現に関連する因子を明らかにするため、ステップワイズ法を用いてロジスティック回帰モデルを検討した結果、体重、血清クレアチニン値、体表面積あたりのオキサリプラチンの投与量、カペシタビンの用量、好中球数、血小板数、皮下脂肪が選択された。これらの因子を用いて多変量ロジスティック回帰分析を行い、ROC 曲線下面積 (AUC) を算出した結果、0.83 であり、良好な精度を示した。また、カペシタビンの用量を除く他の因子は有意に早期副作用発現と関連を示したことから、これらの因子は Cape0X 療法による早期副作用発現の独立した危険因子であることを明らかにした。次に nested k-fold cross validation 法を用いて、モデルの交差検証を行った。種々のアルゴリズムを用いて検討した結果、多変量ロジスティック回帰モデルが最も正解率が高い (75%) ことを示した。また、陽性的中率も 84% と高い結果を示した。

以上、本研究により得られた多変量ロジスティック回帰モデルは Cape0X 療法による早期副作用発現の予測に有益であると考えられたことから、博士論文に値すると判断した。